

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19720105

研究課題名(和文)

形式名詞の文法化に関わる日本語の構文構造史的研究

研究課題名(英文)

The Grammaticalization of Formal Nouns in Syntactic Structure of Japanese

研究代表者：

宮地 朝子(MIYACHI ASAKO)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10335086

研究成果の概要(和文)：

日本語史上の特徴的な変化として、形式名詞の機能語(助詞・助動詞類)への体系的参与が挙げられる。本研究では、名詞由来の多機能語「ほか」「だけ」「はず」「わけ」等の地理的・歴史的・共時的様相を記述分析し、その結果、日本語の名詞の形式化・文法化においては、個々の名詞の語彙的意味や指示性の制約条件、存在文を含む叙述文の構造、非存在文における再分析などがその変化や多様性の構造的基盤となっている可能性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：

The main purpose of this study is to explain how Japanese nouns formalize and grammaticalize and how they participated in current Japanese as grammatical elements systematically. By observing changes and diversities on Japanese nouns hoka, dake, and hazu on synchronic, diachronic and geographical aspects, we can conclude that various usage of the formal nouns can be explained by nominally; e.g. referentiality and restrictions of lexical meaning its own. Furthermore, we can point out the structure of the Predication and existential / Non-existential sentences form the basis on reanalysis which leads to grammaticalization of nouns to particles.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,600,000	420,000	3,020,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：日本語史

キーワード：名詞、文法史、助詞、助動詞、とりたて、非存在文、叙述

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、形式名詞に関わる文法化の現象を見ることによって、動態としての日本語の構文構造を明らかにしようとするものである。形式名詞は現代語において様々な役割を果たしている。いわゆる形式名詞そのものとしての用法の他に、主に以下の3つがあり、これは古代語の様相とも異なる。

A)いわゆる補文標識……「の」「こと」

B) (「～だ」の形で) いわゆる「モダリティの助動詞」……「の」「こと」「もの」「はず」「わけ」「よう」「そう」「つもり」「ところ」等

C)連用句を構成するいわゆる「とりたて詞」「形式副詞」「接続助詞」……「だけ」「ばかり」「くらい」「きり」「ほど」「ため」「とき」等

形式名詞は必ず連体修飾部(関係節)を要求して名詞節を作り、その主要部となる。

A・B・Cはいずれも「連体」の構造でありつつ、さまざまに名詞性を脱し文法化を果たして「連用」に機能する。ここに「連体と連用の境界」としての「形式名詞」を見る。

Aは補文標識として項としての連用句をなし、Bは「～だ」の形でモダリティの助動詞として文全体に話者の判断を付加する。Cでは、あるものは接続助詞、あるものは形式副詞とよばれ、あるものはさらに限定の意味用法を獲得して副助詞・とりたて詞などと呼ばれるが、いずれも、副詞句・付加句としての連用句を成しているといえる。このような形式名詞類の機能語への幅広い参与が古代語には観察されない現象であることに注目すると、形式名詞の性質が、日本語史の上でどのように作用して現在の様相をもたらしたのか、あるいは逆に、日本語の構造のどのような点が、形式名詞のこのようなあり方をもたらしたのかという問題が浮かび上がる。形式名詞の振る舞いが広範かつ多様であり、古代語と近現代語の間で顕著な差を示すものであるがゆえに、形式名詞に関わる文法化現象は、日本語の構文構造史に資する研究対象であると位置づけられる。

現代語の形式名詞に関わる言語事実、名詞であって名詞性を脱したかにみえる諸機能や個別の要素の多様性については、早く寺村秀夫 1978(1992 再録) (『連体修飾のシンタクスと意味—その4—』(1992『寺村秀夫論文集I』くろしお出版))、奥津敬一郎 1974 (『生成日本文法論』大修館書店) 等に指摘があるが、形式名詞においてなぜこのような用法の幅があるのか、またなぜ古代語では形式名詞がこのような役割を持たず、近現代語では顕著な現象となりうるのかという問題設定は、これまでには成されていない。現代語のシステムの中で、形式名詞がいかんしてこのように幅広い用法を持つのかを理論的に考えること、また、歴史的にいかんしてその文法的機能を獲得、参与してきたかを考える本研究課題は、形式名詞本来の性質と日本語の歴史的展開の関わりをあぶり出すことになる。

## 2. 研究の目的

本研究課題は、現代日本語のとりたて助詞(「だけ」「ほか」…)、助動詞(「はず(だ)」「もの(だ)」…)に見られる形式名詞類の機能語への幅広い参与—形式名詞に関わる文法化—を扱うものである。形式名詞や日本語の構造のいかなる側面がこの変化をもたらしたのか、形式名詞がいかん「名詞」の範疇を脱しあるいは脱せず現代語での文法機能を獲得するのか。名詞の性質と連体構造の相互関係、存在文・非存在文、コピュラ文の構造的関連性に加え、否定・数量詞のスコ

ープの広狭にかかわる再分析・類推の作用、言語外的条件・語用論的条件の統合的に理論による説明を目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 基礎的作業

資料となる電子テキスト・コーパスの整理を行う。本研究の目的に合わせ、文献の性格、また用例の発話場面(対話か地の文か)や聞き手条件(社会的位相・特定/不特定・個別/多数)など語用論的条件の抽出を考慮に入れる。入力・データ整備に際しては、研究協力者の補助を受ける。

- ① 古代中央語～近世上方語～近代大阪語～現代京阪方言
- ② 近世江戸語～近代東京語～東京方言
- ③ 現代共通語

### (2) 用例採集・整理

(1)で整理した資料を元に、「ほか」「だけ」「はず」等具体的な形式の用例の採集、分析を行う。

歴史/地理的動態の用例採集においては、近世～近・現代の方言資料等も活用する。言語地理学的手法も援用する。

### (3) 理論的枠組みの参照・整備

文法化・語用論・コミュニケーション論における先端的理論の取り入れを以下の観点において行う。

- ① 名詞の性質と連体構造の相互関係
- ② 存在文・非存在文、コピュラ文(指定文・措定文、所在文)の構造的関連性
- ③ 否定・数量詞のスコープの広狭
- ④ 再分析・類推の作用
- ⑤ 言語外的条件と語用論的条件の整理にかかわる理論的整理

### (4) 理論化

動態を説明しうる構造のモデル化について、計画2年次を目処に行う。

各々の形式名詞の個別の変化の要因と、一般化できる側面を峻別しながら、形式名詞の性質と、関連する構文環境・語用論的条件によって形式名詞文法化のメカニズムをモデル化し、当該の動態を説明しうるものとしての日本語の構文構造、古代語と近現代語の構造的な違いに知見を与える理論的成果を目指す。

### (5) 成果発表

初年度および継続年度の作業を踏まえ、以下の点について逐次学会等での発表・論文化を行う。

- ① 個別の形式名詞に関する論考の発表・論文

化

理論化および枠組みの整理において考察整理が必須となる以下のような問題についても、成果発表につなげる。

②文末名詞述語文、その他の名詞述語文など関連構文と「形式名詞+だ」型助動詞文との関連に関する考察

③遊離数量詞構文、否定呼応表現など関連する構文環境と形式名詞出自のとりたて詞文の関連に関する考察

④付加的連用成分の一般的構造と形式名詞を主名詞とする連用句との関連（共通性・相違点）に関する考察

⑤非存在文における否定のスキープの広狭の解釈と、再分析に関わる理論的考察

#### 4. 研究成果

これまでの研究により得た知見を成果に基づいてまとめると以下の通りである。

(1)特に相対名詞に関し、名詞句としての文中での機能の多様性について未解明の点が多い。名詞研究として再検討の必要がある。

(2)個別の形式名詞の歴史的変化について、従来の研究では不十分な個別事例の精査を実践した。

①「筈>はず(だ)」「分け>わけ(だ)」の文法化の過程には、連体修飾節の個別具体から抽象一般への当該名詞句の指示性の拡張が観察でき、「叙述」の構造を持つ非存在文・否定文やコピュラ文、「指示詞+形式名詞」句といった構文的環境とその環境での名詞句としての指示の曖昧性(および再分析)が文法化の原動力であると考えられる。

②仮説①は付加的連用句由来の「ほか」「きり」「だけ」についても援用可能である。

③「ほか」「だけ」の分析によれば、形式化以前の個別の語彙項目としての制約が、形式化それ自体を含む変化の過程や条件に大きく関与している。中央語と地方語の言語接触や、対立する語彙項目の変化も捨象できない要因であり、ある変化の様相が一般的な現象か個別的な現象かの見極めにおいて留意される。

(3)言語形式の共時的諸用法の発現を説明する枠組みとして、語用論的側面からの分析が示唆的である。例えば「です・ます」形式は、発話場面や聞き手の条件等の語用論的条件に加え、その条件を制限としつつ行われる話者の操作性によって説明できる。この語用論的枠組みは、言語形式の共時的多様性のみならず歴史的な機能拡大の説明にも親和的である。

(4)構造的側面に関し、助詞化した形式名詞の多くが構成する「とりたて句」について「叙述」の主語位置とみることができる。主語句と述語句が構造的に姉妹関係をなす叙述構造は日本語の基盤的構造の一つといえ、名詞句の付加句から主語句への再分析による文法化の構造的基盤ともなる。叙述の一としての(非)存在文が文法化の環境となる蓋然性も指摘できる。

主に「ほか」「だけ」の追究により、文法化した形式名詞の振る舞いには、形式化以前の名詞の語彙的な制約が大きく関与していることが明らかとなった。これに照らせば、上述の仮説は新知見ながら必要条件の提示に留まり、変化の蓋然性を説明するには再検討と補強の余地が大きい。

本研究課題は「名詞の形式化>文法化」という把握のもと、個別名詞の語彙項目としての条件・制約、普遍・一般としての構造的条件・制約、語用論的条件・制約さらに言語外的要因の相互作用としての説明を目指して再設定する必要がある。形式化する名詞の諸類型は、極性やこれと連動する構文構造のタイプによって整理可能であり、文法化の類型もこれに対応すると予測できる。当初計画の実践によって導かれたこの新たな問題設定により、当初の目的と意義に適うのみか、より精度の高い成果を得られると考える。

以上の方針に基づく最終年度前年度応募により、基盤研究(C)「名詞の形式化・文法化にみる日本語の構文構造史」(課題番号22520464)として採択された。発展的研究として継続的に取り組んでいく。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

①「ほか」の諸用法と名詞句の多様性, 宣地朝子, 『名古屋大学文学部研究論集』, 査読有, 166 (文学56), 1-18, 2010年3月.

②「筈からはずへ、訳からワケへ」名詞が文法化するとき, 宣地朝子, 名古屋大学文学研究科公開シンポジウム報告書『拡張し変容する日本語』, 査読無, 名古屋大学文学研究科, 4-16, 2007年6月.

③「共存性からみた「です・ます」の諸機能」, 宣地朝子, 北村雅則, (他4名, 第一著者), 『自然言語処理』(特集号:感情・評価・態度と言語), 査読有, Vol.14 No.3, 言語処理学会, 17-38, 2007年4月.

〔学会発表〕(計5件)

①「日本語の「とりたて」と叙述、その構造条件」片岡喜代子, 宣地朝子, 日本言語学会第139回大会, 2009年11月28日, 神戸大学.

審査有.

〔図書〕(計5件)

- ①宮地朝子, 開拓社, 「日本語否定文と文法化—シカ類の変化と変異を中心に」加藤泰彦ほか編『否定と言語理論』, 170-192 (全477頁), 2010年6月(2009年度中に出版決定).
- ②宮地朝子, 和泉書院, 「ダケの歴史的变化再考—名詞の形式化・文法化の諸条件」田島毓堂編『日本語学最前線』, 425-446 (全754頁), 2010年5月(2009年度中に出版決定).
- ③宮地朝子, ひつじ書房, 「形式名詞の文法化—名詞句としての特性から見る—」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』, 1-31 (全247頁), 2007年7月.

〔その他〕

ホームページ等

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/13411>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮地 朝子 (MIYACHI ASAKO)

名古屋大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号: 10335086

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし